埼玉親善大使レポート

氏名：永瀬大誠

期間：2023 年 8 月 19 日~2024 年 6 月 30 日

滞在先：ドイツ,ニーダーザクセン州

✧　はじめに

　はじめに、埼玉県の親善大使に任命していただいたこと、そして奨学金の形での経済的援助に対して感謝を申し上げます。ご支援により海外での貴重な経験の数々を体験することができました。海外での体験を地域社会や埼玉県のために生かしていこうと思います。

✧　住んでいた地域について

　ドイツは、ヨーロッパ中央に位置し、西にはフランス、東にはポーランド、北にデンマーク、南はオーストリアがあります。

私が住んでいた地域は、ドイツ北西部のニーダーザクセン州です。ニーダーザクセンはドイツで二番目に大きい州であり、エルベ川の水運などドイツの中でも重要な州となっており、海に面している点やオランダなどに近い点から、独自の文化を持った州でもあります。言語はドイツ語ですが、方言の Plattdeutsch(低ザクセン語)が存在し、高齢者の方などは方言を話すほか、あいさつの Moin、レモネード入りビールの Alster(標準語では Radler)、トラクターを意味する Trecker(標準語では Traktor)など語彙の部分では多くの方言が残っています。

✧　留学について

　私は、交換留学団体のプログラムを利用して、交換留学生として１０か月間現地の高校

Oberschule Neu Wulmstorf の 10 年生(高校 1 年生相当)に通いながらホストファミリーのもとで暮らしていました。

私が交換留学を志した理由として、交換留学は、海外の地域社会で生活し、国際理解・交流を深めることに重点を置いています。私は、日本人としてではなく、ほかの文化圏の人間として生活してみたいという興味を持っていたというのというのが一つ目の理由です。また、ほかの文化圏に溶け込んで暮らすということは、生まれ育った日本の文化から離れることも意味しています。ここから、日本の文化というものはどのようなものだったのか、というのを見極め、滞在先に日本の文化や埼玉の文化を伝えるのが 2 つ目の理由でした。

✧　埼玉親善大使として行ったこと

私は埼玉親善大使として、狭山茶を家族とドイツの留学団体の地区委員の方にふるまいました。狭山茶を淹れながら狭山茶は埼玉の名産の茶であること、歴史や特徴などを説明しました。

✧　学校について

私が行っていた学校 Oberschule Neu Wulmstorf は、日本でいう小学五年生から高校一年生が通う学校です。ドイツに大学に入りたい場合、多くの学生はギムナジウムに通うのですが、留学団体側の都合で Oberschule という種類の学校に入りました。この学校は大学への進学というより Ausbuildung という職業訓練、インターンを利用して職に就くという種類の学校で、私が日本で行っていた学校とは全く雰囲気が違いました。教科はドイツ語、英語、数学、政治、経済、地理、生物、化学、体育、宗教などの教科がありました。教科数自体は多いように見えますが、州の各教科の重さはそこまでなので、そこまで多いようには感じませんでした。興味深かった授業は宗教で、キリスト教の歴史について勉強しました。私は取らなかったですが、仏教やイスラム教について学ぶ授業もあったそうです。

学校の雰囲気としては、移民のルーツを持つ人が多いなと感じました。私のクラスではクラスの半分ぐらいが移民のルーツを持ち、クラスによっては 20 人中ドイツ人が 2 人しかいないなんてクラスもありました。ドイツに移民が多いことは知っていましたが、本来の住民であるドイツ人がマイノリティになるほど多いのだと衝撃を受けました。また、日本の感覚から行くと行儀が悪いようなことが多かったです。机に足を乗せるのはもちろん、授業中に

もポテチを食べるなども普通にしていて、最初の１か月ほどはなれるのが大変でした。ただ、帰国して日本の学校に帰ってきたとき、ドイツでの学校生活に慣れすぎて先生に行儀が悪いと何度も注意されました。気を付けよう。

✧　生活について

　私が住んでいたのは小さな村で、駅がある都市部からそこそこ距離があるような場所に住んでいました。周りはリンゴ畑しかなく、遊び場所には困りました。しかし、そういうところだからこそできることもありました。私が留学を通して一番楽しかったと思える経験は地域の少年消防団に属していたことです。消防団の活動は一週間に一度あり、消防の装備で訓練を行くなど、その技能を競い合う大会などもありました。私がいた期間で、５回ほど大会があったのですが、そのすべてでトロフィーをもらい、最後の大会では一位を取りました。消防団の活動は訓練だけではなく、クリスマスなどの季節のイベントや大会後の打ち上げでウォータースライダーが立派なプールなどに行くなど楽しいアクティビティがたくさんありました。

　また、日常生活も低ザクセンの文化を感じるものでした。私が出国する前に想像していたドイツ文化は、白いソーセージとサワークラウトをビール片手に食べるというような感じだったのですが、それはドイツ南部のバイエルンの文化で、バイエルンはドイツじゃないという冗談を言われる始末でした。

私が住んでいたのは小さな村だったので昔ながらの北ドイツの文化が残っていました。魚をよく食べたり、北ドイツ特有の春の祭りがあったりしました。また村の習慣として住人が集まってビンゴゲームをし、ビンゴになった人から景品を貰っていくというものもありました。これは昔、各家庭で家畜(主に豚)を飼っていたころ、家畜の解体で誰がどの部位を持っていくかというのをビンゴゲームで決めていたことに由来するそうです。

　住んでいて感じたことは、皆地域愛が強いなと感じました。日本では自分たちのことを日本人と呼びますが、ドイツではそう言うことは少なく、住んでいる地域または都市の名前＋人(日本でいうと埼玉人や東京人といっている感覚)という言い方をします。歴史的背景も関わっては来ますがそれにしても地域に対する愛着は感じました。

　それに対し、ハンブルクなどの都市部に行くと状況は一変します。私がハンブルクに行くときは公共交通機関を利用していたのですが、電車やバスが時刻通りに来ることはほぼなく、大体いつも５～１５分ほど遅れてきました。電車はよく止まるし、車内では乗るたび毎回物乞いが小銭や食料が欲しいと歩き回っていました。

都市部についても道はたばこの吸い殻だらけで、壁一面に落書きがあり、裏路地からは甘い草を燻した匂いのようなものがしました。都市部ではドイツ文化なんてものは消えうせ、移

民が多すぎてドイツとは？となるような印象を受けました。自分はドイツにいるはずなのにドイツ人が見当たらない、ドイツとしてのアイデンティが消えうせてるような気がして恐ろしかったです。

日本公共交通機関は遅れることがほぼないし、街もきれいです。店やスーパーなどもサービスの質が高いです。どちらが良いなどというつもりはさらさらありまありませんが、ここは日本が誇るべき素晴らしいところだと思いました。

✧　終わりに

私はこの留学を通して、主にアイデンティティについて深く学んだと考えます。ドイツでは、移民が増えてドイツとしてのアイデンティティが迷走しているような印象を常に受けていました。私たちはグローバル化の社会の中で、自分は何人でどんな文化を享受したというアイデンティティを持つことがより一層重要になったと思います。また、海外に住むときは現地の文化をリスペクトして溶け込むことが重要だと考えます。

私は埼玉生まれの埼玉育ちですが、この留学を通して埼玉に生まれた日本人であることを誇りに思うようになりました。それを大切にしてこれからの人生を生きていこうと思います。

ありがとうございました。